The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	19世紀後期英国のデザイン改良運動におけるオリエンタリズムの形成 ： オーウェン・ジョーンズを事例として
Author(s)	竹内, 有子
Citation	デザイン理論. 2022, 80, p. 100-101
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89277
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

19世紀後期英国のデザイン改良運動におけるオリエンタリズムの形成
オーウェン・ジョーンズを事例として

竹内　有子　京都先端科学大学

オリエンタリズムとジョーンズの貢献

19 世紀後期英国のデザイン改良運動においては，非西洋文化圏のデザインが模範とされた。この局面で重要な役割を担ったのが，オーウェン・ジョーンズ（Owen Jones, 1809–1874）である。本発表の目的は，彼の大陸への調査旅行・著述・展示の実践・デザイン論の総合的解析を通じて，そのオリエンタリズムの形成過程と意義を明らかにすることである。なお，ここで用いる語「オリエンタリズム」は，東アジアを含む広義の「オリエント固有の形式・モティーフ・手工芸・技術・生活文化の影響を受けたデザイン」で，西欧の近代オリエント学に派生した芸術の潮流を意味する。

近代芸術のオリエンタリズムは，ナポレオンのエジプト遠征の学術的成果『エジプト誌』（1809–22 年）を分岐点としていた。古代エジプトは西洋文明，とりわけ古典古代文化の前段階と見なされてきたため，これを東方趣味と関連付ける考察は一般的ではないようである。だが近代西欧においては，それまでとは異なって，古代エジプト芸術自体の固有価値が認められるようになった。歴史家ニコラウス・ペヴスナーは，「エジプト様式の復興」と題する論文で，18 世紀後期に至り，エジプト建築の「原始的な美的価値＝堅固・量塊性・単調さ」が評価され始めたと指摘する。ジョーンズも『装飾の文法』（1856 年）を通じて，その固有価値について言及している。発表者は，古代エジプト建築の新しい解釈が，彼のオリエンタリズムの基礎と考える。よって以降の考察では，エジプトとの関わりに照明を当てる。

ジョーンズのグランド・ツアーとその成果

ジョーンズと東方の芸術との接点は，大陸での建築調査旅行にあった。彼は 1831 年から旅に出立，イタリア・ギリシア・エジプト・トルコ・スペインを訪れた。旅の途中，ゴットフリート・ゼンパーの助手として古代建築のポリクロミー（多彩色装飾）を研究していたフランス人建築家，ジュール・グーリー（Jules Goury, 1803–1834）と出会った。建築装飾と色彩への関心を共有した二人は，ナイル川流域のヌビアへと渡る。翌々年 2 月，ルクソールでカルナック神殿を調査した。34 年にはコンスタンチノープルからスペインへと旅立ち，グラナダで半年間に渡りアルハンブラ宮殿の装飾研究に携わった。この建築調査の成果は，二つの著書『ナイル川の眺め：カイロから第二瀑布へ』（1843 年）と『アルハンブラの平面図・立面図・断面図・細部』（1836–45 年）に結実した。

『ナイル川の眺め』におけるジョーンズの彩色図版を見ると，後述するシデナムの水晶宮での展示物，『装飾の文法』の色彩の提言に表れる法則を見て取れる。彼とグーリーは，原色と二次色で，鮮やかな対比色による調和的色彩を用いている。装飾の形と色を統合する，ポリクロミーの重要性が看取される。同時に，彼らが古典主義の範疇に留まらず，古代エジプト建築の色彩の体系を探求したことにも留意すべきである。ただ，建築家ジョーンズにとって現実的な問題とは，現代の建築にポリクロミーをいかに適用するかであった。

シデナムの水晶宮における展示の実践

1851 年大博覧会において注目すべきは，ジョー

ンズが水晶宮の内装で，ポリクロミーを実践したことである。科学的色彩論に基づき，三原色を用いた内装は，同時代の識者の間で議論の的となった。とはいえ，彼の色彩研究は，シデナムの水晶宮でさらなる展開を見せた。ジョーンズは，「エジプト・ギリシア・ローマ・アルハンブラ」展示場を担当した。これらは，彼が実見した建築のポリクロミーを翻案のうえ提示し，形態・色彩に係るデザイン原理を視覚的に補完する場であった。特にエジプト展示場を特徴付けたのは，カルナック大列柱の色彩と形式である。彼は，建築装飾における自然表象とポリクロミーの原型を，古代エジプトに見出し，全芸術の中でも重要性を付した。

アルハンブラ展示場では，彩色テラコッタ・タイルの屋根とダド部分のモザイク装飾は，ミントンによる同時代の新技術をもって作られ，サイズ・装飾の色彩面でオリジナルとは異なる。ジョーンズの目的は，過去のイスラム装飾を現代的に応用する可能性を公衆に見せることにあった。なぜなら，現代の建築様式を創出できないとすれば，色彩法則を用いた新しい装飾インテリアで，それを置き換えられるからであった。さらに，同展示場に関する解説書でジョーンズが述べるに，芸術様式の原タイプは二つある。一つが初期エジプトであり，もう一つの新しい原型が古代ギリシアであった。してみると，ジョーンズが監督した美術展示場は，彼が規範とする装飾芸術のモデルを提示する装置であった。古代エジプト・ギリシア・ローマからイスラム中世に至る，装飾芸術の進化の様相を年代順に表している。そこでアルハンブラ展示場は，エジプトとギリシアという二つの原型が結合した完成形として表象されたのである。

『装飾の文法』再考

『装飾の文法』は，デザイン「37 定理」を体現する「エジプト・ギリシア・ムーア」装飾を手本とし，20 章「自然の葉と花」を通じて，英国デザインの改革を目指す書であった。半数に近い，9 つの章が東方の芸術を扱う点でも特筆される。なかでも，2 章「エジプトの装飾」図版は，異彩を放つ。ジョーンズが自然の植物とその成長を示したうえで，それぞれの装飾への処し方と工芸品への応用を隣接して提示しているからである。

シデナムと同書でも協働したマシュー・D・ワイアットは，「西欧産業におけるオリエンタリズム」（1870 年）において，ジョーンズの功績を高く評価した。彼は，英仏の製品におけるインド・中国・日本の影響を取り上げ，表面装飾に見る「デザインの平面性，鮮やかな色から得られる安らぎ」を東洋の芸術に拠るものとした。しかし，ジョーンズのシデナムでの実践と『装飾の文法』の意味を，正確に読みとり承継したのは，クリストファー・ドレッサーであった。彼は，『装飾デザインの原理』（1873 年）序章「芸術の知」において，古代エジプト装飾が有す宗教的象徴性について詳述した。そして，『装飾の文法』の参照と，水晶宮のエジプト・ギリシア展示場への訪問を読者に推奨した。ドレッサーは，歴史主義に拠らない新しい装飾を生み出すべく，植物学を究めたのであった。

『装飾の文法』は，東方の装飾を「自然の法則・調和・均斉・幾何学的合理性」という西欧の美的価値観の基に評価した。だが，最終的に抽出されたものは，「植物モデル」の重要性であった。実際，同書は古代エジプトの自然の表象に始まり，ジョーンズによる植物構造を解析した図に終わる円環構造を成す。この過程では，植物モティーフの抽象化が問題となった。デザイン改良主義者・ジョーンズが「様式化」と呼ぶ，自然モティーフの抽象化において，範例とされたのは東方の「アルハンブラ」であった。イスラム建築が，インテリアの表面装飾を最大の特色としていたからである。

このように，ジョーンズのオリエンタリズムには，古典主義および歴史様式からの脱却として，非西洋を経由し，近代科学と自然が呼び出された道筋を見ることができる。